

## 第40回 弘明寺サロン 開催記

### なぜ、いま「紙芝居」？

#### ～紙芝居を観、作り、演じる喜び～

日 時：2015年9月19日（土）14：00～16：30

場 所：第4講義室 講演終了後に同窓会・学生団体室で歓談

講 師：平松英子さん

参加者：20名（講師を含む）

#### 〔講師略歴〕

1953年 石川県金沢市生まれ。介護福祉士

2010年 ご夫妻で各地福祉施設で紙芝居上演を始める

2013年より放送大学選科履修生。 現在に至る。

#### 〔講師コメント〕

「紙芝居」と聞くと、昭和30年代まで見られた、あの街頭紙芝居を懐かしく思い出す方も多いと思います。紙芝居はその後、絵本と並ぶ児童文学の一ジャンルとして、新たな脚光を浴びるようになりました。

最近では様々な分野で、紙芝居を手作りする人々も増えています。私共もその仲間ですが、紙芝居を観る喜びとともに、それを作り演じる側の喜びや苦労もお伝えしつつ、紙芝居のもつ魅力に触れてみたいと思います。



今回の講演には、平松英子さんのご主人の平松秀夫さんもいらしてくださいました。平松さんご夫妻は「かみしばいざ・らばん」という劇団名で、紙芝居の上演を行っています。紙芝居を演じる舞台もご主人の手作りだそうです。

最初に平松秀夫さんの拍子木の音が紙芝居の始まりを告げ、『たべられたやまんば』<sup>(註1)</sup>の上演が始まりました。「紙芝居は『読み聞かせ』ではなく『演じる』のです」との講師の言葉通り、やまんばの恐ろしさが伝わってくる紙芝居実演となりました。



次に、『のぼら』『ニャーオン』『ごろん』『ごきげんのわるいコックさん』<sup>(註2)</sup>の4点の紙芝居の紹介がありました。いずれも紙芝居の楽しさを味わうことができる名作です。紙芝居では絵を抜く途中で止めて2枚の絵に繋がりを持たせるなど、抜き方によって豊かな表現方法が可能です。また聞いている人たちとやり取りをすることにより、その反応を見ながらストーリーの語りをつくらせて、聞く人の心に入っていきこともできます。紙芝居の魅力はただ読むだけ・聞くだけではなく、奥が深いものです。

紙芝居には二つのルーツがあります。一つは「絵物語」、もう一つは「大道芸」です。

「絵物語」は平安時代からあり、源氏物語などの「絵巻」や、寺社で字の読めない人々に仏の教えを伝えるための「絵解き」など、絵を見ながら物語を楽しむものです。「大道芸」は江戸時代半ばから庶民の娯楽として盛んになり、「覗きからくり」や「写し絵（幻燈）」など、語りとそれに合わせて動く絵を楽しみました。明治の中頃には紙に描いた人形を動かす「立ち絵」（ペープサート）が現れ、それが「紙芝居」と呼ばれるようになりました。用具が小さくて持ち運べましたので、リヤカーや自転車で積んで祭りや街角などで上演し、人を集めて飴や駄菓子を売ってお金を得るといった方法が取られました。その後もっと平易に演じることができるカード式の「平絵」が考案され、やがて「紙芝居」という言葉はこの「平絵」を指すようになります。

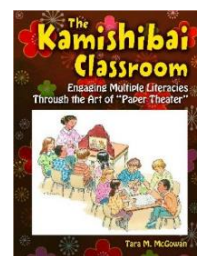
昭和7年には街頭紙芝居師は全国で約5万人いました。街頭紙芝居師が使う紙芝居はレンタルで使用料を払う制度でした。当時の紙芝居は子どもを引き付けるために極彩色の絵や飽きさせないためのストーリー展開がなされ、手描きで常に新しいストーリーのものに入れ替えられていました。そのどぎつさ

のために教育熱心な父兄から批判されることも多かったのですが、子ども達にとっては数少ない娯楽の一つになっていました。またそれと並行して、教会などで演じられる教育紙芝居も存在していました。

戦後はテレビの普及と共に街頭紙芝居は廃れていき、紙芝居は保育所・幼稚園などで教育の一環として演じられるものとなりました。現在は街頭紙芝居師の人数は非常に少なくなっています。平松さんは現役の紙芝居師である梅田佳声さんの上演を見たことがあるそうですが、ストーリーや観客に合わせて語り口を変えるなど演技力が高く、その素晴らしい語り口に引き込まれたそうです。

紙芝居の本質としては以下の5点があげられます。①芝居であるということ、②みんなで見る楽しさ、③演技手との交流、④言葉を育てる、⑤子どもの心の展開のテンポに合致<sup>(注3)</sup>。紙芝居は「子どもだまし」ではなく「子どもに寄り添う」メディアなのです。

日本で誕生した紙芝居は、その魅力に惹き付けられた人達によって Paper Theater という名称で世界に広がっています。例えば Tara M. McGowan の『The Kamishibai Classroom』<sup>(注4)</sup> は、紙芝居に出会ってその素晴らしさを知った著者による紙芝居指南書ともいえる本です。著者は紙芝居を作って演じることを通して子ども達の総合的なリテ



ラシー力（情報や知識を理解して使いこなす能力）を培うことができるとして、アメリカで紙芝居のワークショップを開き、自作の短い紙芝居を通して紙芝居とはどういうものかをワークショップの子どもたちに教えています。平松さんによれば、その要点は次の通りです。①紙芝居の絵は右から左に抜く。逆は出来ない。したがって登場人物も通常は左向きに描く。②絵がシンプル。③紙芝居を作ることは映画のミニチュアを作ること。カメラアングルを考えて作っていく。④ストーリーが起承転結で展開していく。

講師の平松さんの知り合いのフランス人も紙芝居の魅力に惹き付けられた一人で、職業欄に「紙芝居パフォーマー」と書いています。フランス国立ギメ東洋美術館の「Asia and Theater」展にも紙芝居自転車が出展されていたそうです。（左写真 G. Guyot 氏撮影）

講演途中の10分間の休憩の後、再び紙芝居の実演が行われました。次は、平松さんご夫妻制作の紙芝居『つぎの春に』でした。ご夫妻は、紙芝居の制作を、原作・作画を夫の秀夫さん、演じ方を妻の英子さん（ペンネーム千瑛さん）、脚本は作品によってご夫妻のどちらかが担当して二人三脚で行っています。



現在手作り紙芝居を制作する人は多く、手作り紙芝居コンクールも箕面や横浜で開催されています<sup>(注5)</sup>。平松さんは箕面コンクールで2013年に『泣くなたろう』で特別賞（大阪国際児童文学振興財団賞）を受賞、横浜コンクールでは2012年に『牛のなみだ』で優秀賞を受賞しました。他にも箕面コンクールで『かにのしょうばい』が入選、『がちょうのたんじょうび』『大阪のおっちゃん』が共に佳作という評価を受けています。

平松さんご夫妻は、3・11以降は福島の話を通紙芝居にして伝えようとしています。実際に福島を訪れて紙芝居を制作していますが、思いを伝えるのはなかなか難しいようです。どのように福島の人々の思いを伝えていくか、それが現在の課題とのことでした。



質疑応答では参加者から街頭紙芝居の思い出話も出て、和やかな雰囲気の中、講演が終了しました。

(以上 記録・安達)



注：

- 1：『たべられたやまんば』 童心社 脚本：松谷みよ子／絵：二俣英五郎
- 2：『のぼら』 童心社 原作：小川未明／脚本：堀尾青史／絵：桜井誠
- 『ニャーオン』 童心社 脚本：都丸つや子／絵：渡辺享子
- 『ごろん』 童心社 脚本／絵 ひろかわさえこ
- 『ごきげんのわるいコックさん』 童心社 脚本／絵 まついのりこ
- 3：阿部明子 「紙芝居が育てるもの—幼児教育・保育の中の紙芝居」より  
子どもの文化研究所編 『紙芝居—子ども・文化・保育』 p. 131～p. 138 一声社
- 4：Tara M. McGowan  
『The Kamishibai Classroom - Engaging Multiple Literacies Through the Art of "Paper Theater"』  
LIBRARIES UNLIMITED
- 5：箕面手づくり紙芝居コンクール 箕面市教育委員会／人と本を紡ぐ会 主催  
手づくり紙芝居コンクール 紙芝居文化推進協議会 主催 (横浜市にて開催)